匂衣（におい）～The blind and the dog～

上演時間約８０分　韓国ヴァージョン

作　鈴木アツト

登場人物

●ペク・ヨンジュ

●後藤田彩香

●後藤田鈴蘭

●万丈武

●光一郎

●厳島

註　本作品の無断上演を禁じます。上演をご希望の場合は、ｉｎｆｏ@ｉｎｎｏｕ.ｃｏｍ 宛にお問い合わせください。

第1場　後藤田家の応接間

豪華な応接間。奇妙な形をしたお面、布や毛皮でコラージュされた現代美術の絵画など、高級そうだがさわってみたくなるような（観客の触覚欲を刺激する）骨董品が飾られている。そこで待たされているヨンジュ。荷物の中から手鏡を出し、髪型を整えたりして、時間を潰している。

ヨンジュ「はじめまして」

ヨンジュ、壁（客席）に向かって、日本語の「はじめまして」を声に出してみる。やや緊張した面持ち。しかし、たくさんの骨董品を眺めていると、それを使って遊びたくなってくる。例えば、置き人形の一つに、

ヨンジュ「はじめまして」

と手を差し出して、握手したり。そういった感じで、骨董品のいくつかをさわったり、持ち上げたりして、遊びを始める。子供ぽい遊び。遊んでいるうちに、飾られていたお面の瞳の部分が取れてしまう。

ヨンジュ「え?」

うろたえるヨンジュ。すると、そのお面はどんどん壊れていく。壊れたお面をどうするべきか?どこかに捨ててしまえばバレないのではないか?そう考えて壊れたお面を持ち上げた途端、

後藤田「お待たせしました」

ドアがガチャッと開く。後藤田鈴蘭が入ってくる。ヨンジュ、慌ててお面を役者ならではのウォームアップの体操で隠す。

後藤田「はじめまして後藤田です」

ヨンジュ「（変な体勢で）はじめましてペク・ヨンジュです」

後藤田、値踏みをするようにヨンジュを見つめながら、

後藤田「ペク・ヨンジュさん」

ヨンジュ「はい」

後藤田「遠かったでしょ？うち？」

ヨンジュ「そんなでもなかったですよ」

後藤田「駅からはタクシーで？」

ヨンジュ「いや歩いてきました」

後藤田「よく道わかりましたね」

ヨンジュ「ずっとまっすぐですから迷いませんよ」

後藤田「でもあんなにずっとまっすぐだと行き過ぎてないか不安になりません？」

ヨンジュ「地図とにらめっこしながら来たんで」

後藤田「ペクさんは地図に強いのね」

ヨンジュ「歩くの好きなんですよ。いつも稽古場まで二十分ぐらい歩いてるんです」

後藤田「日本に来て何年になるの？」

ヨンジュ「３年目です」

後藤田「それでそんなに日本語喋れるの？」

ヨンジュ「俳優は外国語を覚えるの早いんです。覚えないと台詞が減ってくから」
後藤田「小劇場でしたっけ？」
ヨンジュ「はい」
後藤田「素晴らしかったわ、あなたの演技。ああいうのを変幻自在って言うんでしょうねえ。椅子を使って人から蛇になったり人から象になったり」
ヨンジュ「ありがとうございます」
後藤田「私この間が初めてだったんです。小さな劇場でお芝居を拝見するの。あれってお手当てはちゃんと出るの？」
ヨンジュ「出たり出なかったり」
後藤田「じゃあ結構出ることも多いんですか？」
ヨンジュ「出なかったり出なかったりごく稀に出るんです」
後藤田「それでは」
ヨンジュ「はい」
後藤田「早速ですがお話させていただいてよろしいですか？」
ヨンジュ「（変な体勢のままで）お願いします」
後藤田「どうしたんですか？」
ヨンジュ「いえ大丈夫です」

後藤田、ヨンジュの変な体勢を訝しがり、ヨンジュに近づく。

ヨンジュ「（困って）ああ、ああ、ああ」

ピンポーンとチャイムの鳴る音。

後藤田「誰かしら？」

後藤田、インターフォンに出る。万丈武、後藤田家の玄関の前に登場。万丈は、スーツに今風の髪形という格好の若者。万丈、営業スマイルで後藤田とインターフォン越しに話す。

後藤田「はい」
万丈「今よろしいでしょうか？」
後藤田「どういったご用件でしょうか？」
万丈「私ニコラクリームの万丈と申します」
後藤田「はい」
万丈「この度我が社の新製品が発売されまして」
後藤田「はい」
万丈「是非一度お試しいただけないかと思いお持ちした次第なんですが」
後藤田「私いつも決まったところの物を使ってるの」
万丈「そうですよね。そうですよね。けれども。けれどもこの度の新製品はそういったお客様にも満足していただけるものでございまして特にこの（鞄からハンドクリームを取り出し）モイスチャーニコラクリームは、、」
後藤田「（遮るように）間に合ってるわ」
万丈「サンプルだけでも使ってみていただけないですかね？」
後藤田「じゃあポストに入れておいてください」
万丈「かしこまりました。それでは明日また伺いま」

後藤田、インターフォンを切る。万丈、退場。

後藤田「どこまでお話ししましたっけ？」
ヨンジュ「まだ何も」
後藤田「あらそう？」

ヨンジュ「はい」
後藤田「では始めからお話させていただきます」
ヨンジュ「（変な体勢のまま）お願いします」
後藤田「あのうさっきから、、」
ヨンジュ「いえ大丈夫です」

後藤田、再び、ヨンジュの変な体勢に気づき、ヨンジュに近づく。

ヨンジュ「ああ、ああ、ああ、、すみません、ついさわりたくなっちゃって」
後藤田「壊しちゃったんですか？」
ヨンジュ「はい」
後藤田「後で直させますから。どうぞお座りください」
ヨンジュ「ありがとうございます」

後藤田、ヨンジュに椅子を勧め、ヨンジュ座る。

後藤田「あなたに演じてもらいたいのは、我が家の愛犬、ブービエ・デ・フランダースのオス、ヨソベエ」
ヨンジュ「はい？」
後藤田「ブービエ・デ・フランダースはあのフランダースの犬のパトラッシュとして日本でもお馴染みの犬種で番犬として外敵に対してはものすごく攻撃的なのに飼い主には極めて従順で忠実なんです。とても穏やかな性格で人間と接することができる犬なんです。今回あなたにはただひたすらこの手と尻尾を使って」

後藤田、大きな手袋のような犬のそれぞれの部位（前足と尻

尾）のついた道具をヨンジュに渡す。前足の道具には足の爪と毛がついており、尻尾の道具はやや長い毛で作られている。

後藤田「ヨソベエの振りをしてもらいたいんです」
ヨンジュ「、、、（呆然として、二つの手袋のようなものを眺める）」
後藤田「手と尻尾を使うと言ってもヨソベエはお行儀のいい子だったから彩香に突然抱きついたりなんて下品なことはしなかったから安心してください。彩香は妙に気持ちが落ち込むことがあるのだけどそんな時にヨソベエは前足を彩香の膝にポンとのせていたの。だからそういう時にだけでいいので彩香の膝に前足をのせてあげてほしいんです」
ヨンジュ「、、、（呆然としている）」
後藤田「何か質問はございますか？」
ヨンジュ「何かの冗談でしょうか？」
後藤田「いたって真剣ですけれども」
ヨンジュ「演技の仕事があるって聞いたんです」
後藤田「はい演技の仕事です」
ヨンジュ「演技って犬ですか？」
後藤田「そうです」
ヨンジュ「犬ですよ？」
後藤田「犬じゃいけませんか？」
ヨンジュ「なんで犬になるんですか？」
後藤田「ヨソベエ死んじゃったんですよ」
ヨンジュ「え？」
後藤田「交通事故です。散歩中にちょっと目を離していたら向こうからすごい大きなクロネコヤマトが走ってきてヨソベエを轢いたの。猫なのにヨソベエを轢いたの」
ヨンジュ「ご愁傷様です。でもそれと私がヨソベエを演じることっ

てどうつながるんですか？」
後藤田「ヨソベエを生き返らせたいんです。少なくとも彩香の前では」
ヨンジュ「彩香さん？」
後藤田「娘です」
ヨンジュ「彩香さんは知ってるんですよね？」
後藤田「彩香にはヨソベエは入院中だって言ってある。そしてもう二週間たった。つまりね、そろそろ退院しなきゃいけないの」

ヨンジュ、立ち上がり、応接間を出て行こうとする。

後藤田「どこ行くんですか？」
ヨンジュ「帰ります」
後藤田「ちょっと待って。何言ってるんですか？」
ヨンジュ「こんな仕事請けられるわけないでしょ？」
後藤田「ヨンジュさんヨンジュさん、、お面！」

後藤田、突然大きな声で叫ぶ。ヨンジュ、立ち止まる。

ヨンジュ「は？」
後藤田「これ！３００万円！あなたが壊したやつ」
ヨンジュ「嘘でしょ？３００万？」
後藤田「お仕事を引き受けてくださるんだったら忘れてもいいんですけどね」
ヨンジュ「そんなの卑怯です」
後藤田「あなたが勝手に壊したんです」
ヨンジュ「３００万？」
彩香の声「ママー、ドライヤー知らない？」

後藤田「え？」
彩香の声「ドライヤーがいつものところにないんだけどママ使った？」
後藤田「（ヨンジュに）ちょっと待ってて」

後藤田、退場。一人残されるヨンジュ。ドアが開き、彩香が入ってくる。首には、豪華な金の首飾り、指には大きな宝石のついた指輪をしている。彩香、ヨンジュに全く気づかず、椅子に座って髪を梳かし始める。その様子を見つめるヨンジュ、彩香の目が見えないことに気づく。二人だけの時間の緊張感が一瞬そこに現れる。彩香、部屋の臭いを嗅ぐ。ペク・ヨンジュの匂いがする（音で表される）。

彩香「え？ママ？」

ちょうど、後藤田が戻ってきて、

彩香「誰かいるの？」
後藤田「ああ（ヨンジュを見て）こちらは獣医の」
ヨンジュ「え？獣医？」
後藤田「ペク先生」
ヨンジュ「あ、はいペク・ヨンジュです」
彩香「（後藤田に）え？外国の人？」
後藤田「ええと。韓国人の先生。ヨソベエを手術してくださったのよ」
彩香「、、、はじめまして」
ヨンジュ「はじめまして」
彩香「先生、ヨソベエは元気になりましたか？」

ヨンジュ「ええと?すっかり?元気です?」

後藤田、ジェスチャーでヨンジュに話を先に進めるように促す。

彩香「今どこにいるんですか?」
後藤田「先生の病院よね?」
ヨンジュ「え?あ?はい」
彩香「(ヨンジュに)今日は帰って来ない?」
後藤田「もしかしたら今日帰ってくるかも」
彩香「(ヨンジュに)本当?」
後藤田「彩香。そのことについて先生とまだお話が残ってるからお部屋に戻ってて」
彩香「、、、はい。(ヨンジュに頭を下げながら)先生、よろしくお願いします」
ヨンジュ「わかりました」
後藤田「ハイ、ドライヤー」

後藤田、彩香がヨンジュの手を握ろうとしたところを、横からドライヤーを差し出して、二人の手が触れるのを阻む。彩香、ドライヤーを受け取り、おどおどしながらドアの外へ出て行く。

ヨンジュ「目が、、、」
後藤田「物心つくちょっと前に病気で。でもかわいい子でしょ?」
ヨンジュ「はい、、、あの指輪は奥様が買ってあげたんですか?」
後藤田「そうです」
ヨンジュ「すごい指輪ですね。私びっくりしちゃいました」

後藤田「あれぐらいこの家にはいくらでもありますから」
ヨンジュ「でも彩香さんには見えないですよね？」
後藤田「指環のおかげで他の人があの子を見る。今のあなたみたいに」

と喋りながら、後藤田、ヨンジュに香水をかける。

ヨンジュ「（変な臭いを感じ、鼻をクンクンさせながら）なんですか？これは」
後藤田「彩香あなたの匂い嗅いでいたでしょ？」
ヨンジュ「そういえば」
後藤田「あの子とても鼻がいいんです」
ヨンジュ「これ香水？」
後藤田「犬の体臭の香水」
ヨンジュ「は？」
後藤田「ヨソベエの遺体から特注で作らせたんです」
ヨンジュ「遺体？」
後藤田「この臭いがしないと彩香にヨソベエじゃないってバレちゃうから」
ヨンジュ「今遺体って言いました？」
後藤田「はい」
ヨンジュ「うげえ」
後藤田「大丈夫です。香水です。人体に害はありません」
ヨンジュ「あのうやっぱり、、、」
後藤田「（断られるのを先回りして）日給５万円ならどうですか？」
ヨンジュ「お金の問題じゃないんです。ヨソベエ死んじゃってるんですよね？」
後藤田「はい」

ヨンジュ「ってことは彩香さんを騙すってことですよね？」
後藤田「そうです。騙したいからあなたにお願いしてるんです」
ヨンジュ「騙すのはよくないです！」
後藤田「ピュアですか？」
ヨンジュ「え？」
後藤田「まさかピュアじゃないでしょうね？」
ヨンジュ「別にピュアじゃないですけど」
後藤田「ピュアペクさん」
ヨンジュ「ペクでいいです」
後藤田「生まれてから今まで嘘ついたことないって言うんじゃない
　でしょうねえ？」
ヨンジュ「もちろんしょっちゅう嘘ついてますけど」
後藤田「あなたがやってくれなかったら彩香はヨソベエを失うんで
　す。それでも断るって言うんですか？」
ヨンジュ「、、、」
後藤田「彩香にとってあなたのヨソベエが真実であればいいでし
　ょ？あなたの演技力で、、、お願いします」
ヨンジュ「私の、、、」
後藤田「お願いします」
ヨンジュ「わかりました。やらせてください」
後藤田「ありがとうございます。じゃあ早速ですが」

後藤田、道具の前足と尻尾を使って、実際にデモンストレー
ションしてみせる。

後藤田「これがお手。これがお回り。これが伏せ。これがゴロン。
　彩香がいろいろ言ってくるからそれに合わせて対応して」
ヨンジュ「こんなんで本当にバレないんでしょうか？」

後藤田「目を瞑ってみて」

ヨンジュ、目を瞑り、後藤田が操る道具の前足と尻尾にさわる。

ヨンジュ「え？おおおおお犬ぽい」
後藤田「私達は物を見る時まず全体を見てから部分を見る。でも彩香はまず部分を把握してから全体を見る。だから丁寧に部分を感じさせて」

後藤田、ヨンジュに道具の前足と尻尾を渡す。ヨンジュ、道具の前足と尻尾を実際に動かしてみる。

ヨンジュ「声は出せない？」
後藤田「ちょっとなら吠えてもいいですよ」
ヨンジュ「私、犬の鳴き真似得意なんです」
後藤田「ヨソベエはどちらかというと無口であまり吠えな」
ヨンジュ「ワン、、、こんな感じどうですか？」
後藤田「いいんじゃないですか」
ヨンジュ「ウォウォウォーウォン！」
後藤田「すごくいいです！でも吠えすぎるのはなしです。ヨソベエは無口であまり吠えない犬でしたから」
ヨンジュ「わかりました。ウォン」
後藤田「ではとりあえず一週間、ヨソベエを演じていただけますか？」
ヨンジュ「はい」
後藤田「ありがとう。実はね今日これから彩香と映画に行くことになってるの」

彩香、登場。鏡台の前の椅子に腰掛ける。彩香がいるところは、彩香の部屋になる。

後藤田「私の支度ができたらすぐに。だから今日は１５分だけヨソベエを演じる。いい？１５分絶対に人間だってバレないようにしてください」

ヨンジュ「わかりました」

後藤田「じゃあ行きましょう」

後藤田とヨンジュ、部屋を出ようとすると、ヨンジュの携帯電話が鳴る。

ヨンジュ「（慌てて電源を切って）すみません。メールです」

後藤田「ケータイの電源は切ってください。犬はケータイ持ってないので」

ヨンジュ、後藤田に携帯電話の電源を切っているのを見せる。

ヨンジュ「はい」

後藤田、部屋を出る。ヨンジュ、後藤田に続いて部屋を出て行く。

第２場　後藤田家・彩香の部屋

真っ暗な部屋の中、一人、鏡台の前の椅子に腰掛けている彩

香。ドビュッシーのアラベスクが聴こえてくる。それは彩香の頭の中だけで響いている音楽。彩香、ピアノを弾く真似をする。音楽が盛り上がるにつれて、彩香の指先は、空想の鍵盤から離れ、湖水を飛び立つ白鳥のように羽ばたいていく。踊り始める彩香。それは、母親にも邪魔されない彩香だけの時間。後藤田とヨンジュが、彩香の部屋に入ってくる。後藤田、部屋のあかりをつける。スイッチのパチンという音が大きく響く。彩香だけの時間が突然消えてしまう。

彩香「ママ？」
後藤田「そうよ」
彩香「入ってくるなら入ってくるって言って」
後藤田「ちゃんとノックしたわ。あなたが気づかなかったのよ。（ヨンジュをチラッと見て）それより、いいニュースがあるの」
彩香「、、、」
後藤田「帰ってきたよ、ヨソベエ」
彩香「ヨソベエ？！」

後藤田、ヨンジュを彩香の前へ押し出す。彩香、後藤田とヨンジュの方へ近づいていき、

彩香「（抱こうとしながら）ヨソベエ、おいで」

ヨンジュ、つい、彩香から逃げてしまう。彩香、ヨソベエだと思って捕まえたのは、後藤田。

後藤田「ママよ」
彩香「ヨソベエは？」

後藤田「ヨソベエは緊張してるみたい。落ち着いて座って」

後藤田、彩香を椅子に座らせる。

後藤田「彩香、お手してみようか」

彩香「お手」

ヨンジュ、彩香のそばへゆっくり近づき、道具の前足でお手をする。

後藤田「わーよくできた」

彩香「お回り」

後藤田「ヨソベエお回りよ」

ヨンジュ、道具の尻尾を振りながら、回る。

後藤田「わー上手上手」

彩香「伏せ」

ヨンジュ、伏せをする。

彩香「ゴロン」

ヨンジュ、お腹を見せる。彩香、ヨソベエ（ヨンジュ）のお腹をさわろうとする。

後藤田「あ！ちょっと待って。ゴロン禁止」

その声と同時に、ヨンジュ、慌てて、彩香の手を避ける。

彩香「なんで？」
後藤田「病み上がりだから、、、優しく」
彩香「、、、」
後藤田「彩香。座って」
彩香「（椅子に座って）お手」

ヨンジュ、道具の前足でお手をする。彩香、ヨンジュのお腹のあたりに手を伸ばす。ヨンジュ、よけるが、尻尾が彩香の手に触れてしまう。

彩香「ママ」
後藤田「何？」
彩香「なんか変、、、」
後藤田「何が？」
彩香「お腹に尻尾がある」
後藤田「変じゃないわ。ヨソベエは今、後足でお手していたから」
彩香「後足で？」
後藤田「後足で。すごいわヨソベエ。どこで覚えたのかしら」
彩香「お手」
ヨンジュ「、、、」
彩香「お手」

ヨンジュ、道具の前足でお手をする。彩香、道具の前足を撫でる。

後藤田「彩香にさわられて嬉しそう」

彩香「本当？」
後藤田「本当よ。尻尾だってすごい振っちゃって」

ヨンジュ、道具の尻尾を勢いよく振る。彩香、ヨソベエ（ヨンジュ）の匂いを嗅ぐ（その匂いは音で表される）。

彩香「ヨソベエの匂いがする」
後藤田「それじゃあママも支度してきていい？」
彩香「はい」
後藤田「ヨソベエはまだ病み上がりなんだからね。優しくしてね」

後藤田、ヨンジュに目配せして、退場。彩香、後藤田が出て行くのを音で確認した後に、

彩香「ヨソベエ」

彩香、ヨソベエ（ヨンジュ）にさわろうとするが、ヨンジュが逃げるのでさわれない。

彩香「伏せ」

ヨンジュ、彩香のそばで伏せをする。

彩香「ゴロン」

ヨンジュ、お腹を見せる。それと同時に、彩香、ヨソベエ（ヨンジュ）のお腹をさわろうとするが、その度に、ヨンジュは逃げる。彩香、しつこく追いかける。

彩香「ヨソベエ、ゴロン」

ヨンジュ、慌てながらも転がりながら逃げるので、捕まらない。

彩香「ヨソベエ」

彩香、ヨソベエ（ヨンジュ）に自分の近くに来るように手招きする。ヨンジュ、彩香の周りを犬のように駆け回る。

彩香「ヨソベエ、お手」

ヨンジュ、道具の前足でお手をする。彩香、ヨソベエ（ヨンジュ）の匂いを嗅ぐ（その匂いは音で表される）。彩香、部屋にあったボールを取り出して、投げる。

彩香「ヨソベエ、ゴー」

ヨンジュ、ボールを拾って、彩香に投げて渡す。しかし、それは彩香にとってはいつもと違う渡され方。彩香、もう一度、ボールを投げる。

彩香「ヨソベエ、ゴー」

ヨンジュ、ボールを拾って、彩香に投げて渡す。彩香にとっては、やはりいつもと何かが違う。彩香、ヨソベエの遊び道具の噛んで引っ張るタオルを取り出して、垂らす。

彩香「ヨソベエ、、、ヨソベエ」

ヨンジュ、それを犬のように口に咥えて引っ張り合う。彩香も強く引っ張るので、綱引きのようになる。ヨンジュ、つい手で引っ張ってしまいタオルを彩香から奪ってしまう。ヨンジュ、慌ててタオルを彩香の方に投げ返す。

彩香「ヨソベエ?」

彩香、部屋の奥から、犬用の水皿を用意する。

彩香「ヨソベエ、よしっ!」

彩香、水皿の前で耳をすます。ヨンジュ、水皿を彩香から遠ざけ、そこで水を犬のようにビチャビチャ音をさせて飲む。ビチャビチャ音はSEになり、部屋の中に大きく響く（その音が彩香の耳に強く響いてることを表す）。水を飲んでいたヨンジュ、むせて、彩香の顔に水を吐き出してしまう。

彩香「誰?」
ヨンジュ「、、、」
彩香「犬じゃないよね?」
ヨンジュ「、、、」
彩香「（匂いを嗅ぎながら）なんでヨソベエの匂いがするの?」
ヨンジュ「、、、」
彩香「答えて」
ヨンジュ「、、、（犬の真似をしてハッハッハッハッ息を吐く）」

彩香「え？」
ヨンジュ「、、、（犬の真似をしてハッハッハッハッ息を吐く）」
彩香「やめて」
ヨンジュ「、、、（ホッホッホッホッと息の吐き方を変えて）」
彩香「似てない。ヨソベエはそんな息の吐き方しない」
ヨンジュ「、、、（ハーハーハーハーと息の吐き方を変えて）」
彩香「やめて！ヨソベエの振りするの」
ヨンジュ「、、、（ウッウッウッウッと息の吐き方を変えて）」
彩香「本物のヨソベエはどうしたの？お願い教えて」
ヨンジュ「、、、（ゼッゼッゼッゼッと息の吐き方を変えて）」
彩香「お願い。喋って。お願い」
ヨンジュ「ウォン」
彩香「そうじゃなくて」
ヨンジュ「ウォンウォン」
彩香「喋って」
ヨンジュ「ウォンウォン」

彩香、部屋の奥から、ドッグフードを持ってくる。

彩香「はい」
ヨンジュ「、、、」
彩香「食べて」
ヨンジュ「、、、」
彩香「あなたが自分を犬だと思うなら食べられるよね？」

ヨンジュ、躊躇する。

彩香「ほら食べられない」

ヨンジュ、思い切って、ドッグフードを食べる。

彩香「嘘？まさか食べてるの？」

ヨンジュ、ドッグフードをどんどん食べる。彩香、耳をすます。途端、ヨンジュがドッグフードを食べるゴリッゴリッという音。ゴリッゴリッ音はＳＥになり、部屋の中に大きく響く（その音が彩香の耳に強く響いてることを表す）。

彩香「食べられないでしょ？やめなさいよ」

ヨンジュ、ドッグフードをどんどん食べる。

彩香「お腹壊すったら」

ヨンジュ「、、、」

彩香「何なの？あなた」

ヨンジュ「、、、」

彩香「誰？」

ヨンジュ「、、、」

彩香「ヨソベエのこと１００万回は撫でたの。１００万回はキスしたの。その時の感覚は今も手に残って、、、お手」

彩香は、１００万回撫でたヨソベエの感覚が自分の中で薄らいでいるという事実に気づいてしまう。ヨンジュ、道具の前足でお手をする。彩香、道具の前足を掴んで、そのままヨンジュの腕まで手を伸ばそうとした瞬間、

後藤田の声「彩香」

後藤田、着替えて、登場。

後藤田「そろそろ行くわよ」
彩香「ママ」
後藤田「何？」
彩香「私行きたくない」
後藤田「何言ってるの？」
彩香「ヨソベエといたい」
後藤田「帰ってきてから遊べばいいじゃない？別にヨソベエいなくなるわけじゃないんだから」
彩香「だって行きたくないんだもん」
後藤田「あなたが見たいって言った映画なのよ。せっかくおめかししたんだから行きましょう」

彩香、渋々黙って、外出する準備をする。そして、ヨンジュをまるで見えているかのように見つめる。彩香、退場。後藤田、ヨンジュに目配せして、退場。

光一郎の声「それでドッグフード食べたの？」

光一郎、オムライスの盛り付けられた皿を持って、登場。空間は、ヨンジュのアパートに変わる。

第3場　ヨンジュのアパート

ヨンジュは、ぐったりと疲れている。

ヨンジュ「食べるしかしょうがないでしょ？あの状況じゃ」
光一郎「どんな味だった？」
ヨンジュ「思い出したくもない」
光一郎「いいじゃん。教えろよ」
ヨンジュ「石ころよ」
光一郎「は？」
ヨンジュ「パサパサしてカリカリして石ころよあれは。人間が食べるもんじゃない」
光一郎「だって人間が食べるもんじゃないもん（と言って笑う）」
ヨンジュ「笑い事じゃないよ？こっちは必死だったんだよ？」
光一郎「はい。人間が食べるもん」
ヨンジュ「オムライス！」

光一郎、仕上げのケチャップをたっぷりかけてから、ヨンジュの前にオムライスを出す。

ヨンジュ「いい匂い！」

ヨンジュ、犬のようにオムライスの匂いを嗅ぐ。

光一郎「一日で犬みたいになったね」
ヨンジュ「うるさい！いただきます」

ヨンジュ、がっつくように食べる。

光一郎「おいおいゆっくり食べろって。消化に悪いだろ？」

光一郎、ヨンジュから皿を取って、自分も食べる。

ヨンジュ「ああ、やっぱり光一郎のオムライスは最高だな」

光一郎「どういたしまして」

ヨンジュ「これだったらお店出せるよ」

光一郎「そうねえ。はい」

光一郎、スプーンでヨンジュの口にオムライスを運ぶ。口を開けて食べさせてもらうヨンジュ。

光一郎「でももうちょっとやってみたら?」

ヨンジュ「え?」

光一郎「だから明日でやめないでさ」

ヨンジュ「無理」

光一郎「演技でお金がもらえる仕事なんて滅多にないんじゃない?」

ヨンジュ「じゃあ明日もドッグフード食べろってこと?」

光一郎「そこは工夫してさ」

ヨンジュ「どうするの?」

光一郎「後藤田さんに人間が食べられる犬の餌にしてくださいって頼むとか」

ヨンジュ「例えば何?」

光一郎「煎餅とか」

ヨンジュ「煎餅?」

光一郎「ヨンジュ(お前)、日本の煎餅好きじゃん?それなら続けられるんじゃん?」

ヨンジュ「ドッグフードの問題じゃないの」

光一郎「じゃあ何の問題?」

ヨンジュ「私は目の前でヨソベエを演じてるんだよ?」

光一郎「彩香さんの目の前で」
ヨンジュ「彼女は私の手にもさわる」
光一郎「お手するんだもんね。お手」

ヨンジュ、光一郎の手に、自分の手をのせて、

ヨンジュ「（韓国語）マーミアパ」
光一郎「ん？」
ヨンジュ「心が痛い」
光一郎「（韓国語）マーミアパ」
ヨンジュ「なんでこんな嘘つかなきゃいけないのよ？」
光一郎「、、、ヨソベエといたいって言ったよね？彩香さん。嘘だってわかってるのに」
ヨンジュ「、、、」
光一郎「どうして欲しいんだろう？何が見たいんだろう？」
ヨンジュ「とにかく私はこれ以上できません」

ヨンジュ、光一郎の胸に自分の頭をつけて甘える。

光一郎「甘えて、みる。抱いて、みる。撫でて、みる」
ヨンジュ「ん？」
光一郎「日本語は動詞に見るをつけるとチャレンジになるんだよ。もうちょっとやって、、、みたら？」
ヨンジュ「（甘えながら）無理」
光一郎「ヨンジュ（ねえ）」
ヨンジュ「ん？」
光一郎「臭い。犬臭い。これヨソベエ臭？」
ヨンジュ「残るんだね。この香水」

光一郎「とても女優の匂いとは思えませんね」
ヨンジュ「うるさいなあ。光一郎だって臭い」
光一郎「何臭い？」
ヨンジュ「男臭い」

光一郎、自分の臭いを嗅いで、

光一郎「一緒にお風呂入ろう」
ヨンジュ「今すぐ？」
光一郎「うん、お手」

ヨンジュ、そのおふざけにのって、お手をする。光一郎も笑いながら、

光一郎「お手」

ヨンジュと光一郎、お手を繰り返していく。そして、いつの間にか、光一郎と後藤田が入れ替わっている。

第４場　後藤田家の応接間

後藤田とヨンジュ、犬の道具を使いながら、ヨソベエの振りをする稽古をしている。犬の道具は、抱き枕のような形状をした胴体の部分（全体が毛で覆われている）が加わって、三つになっている。

後藤田「ゴロン、、、お手、、、お回り、、、伏せ、、、ゴロン、、、お手、、、お回り、、、伏せ、、、ゴロン、、、お手、、、お回り、、、ゴロン、、、お

手」

ヨンジュ、後藤田の言葉に合わせて犬の演技をしていくのだが、ある時は道具の前足と尻尾を持ち、ある時は道具の胴体を持ちと、段々と手が追いつかなくなっていく。最後のお手では、前足の代わりに尻尾を後藤田の手に置いてしまう。

ヨンジュ「無理です」
後藤田「え？」
ヨンジュ「無理です。手が足りません」
後藤田「でも、、」
ヨンジュ「（遮って）無理です」
後藤田「そこを何とかならないの？」
ヨンジュ「今日のところは後藤田さんがやるしかないんじゃないでしょうか？」
後藤田「私が？」
ヨンジュ「はい。私が足と体をやるんで。後藤田さんは尻尾をやってください」
後藤田「私役は誰がやるの？」
ヨンジュ「え？」
後藤田「私がヨソベエの尻尾をやったら私役は誰がやるの？」
ヨンジュ「後藤田さん役は後藤田さんがやってください」
後藤田「つまり一人二役ってこと？」
ヨンジュ「はい」
後藤田「それ無理よ」
ヨンジュ「無理って？」
後藤田「私が尻尾を演じてさらにえ？私が私を演じるんでしょ？」
ヨンジュ「尻尾は振るだけです」

後藤田「無理。混乱してきちゃったもの」
ヨンジュ「でもやらないと昨日と同じです」
後藤田「、、、」
ヨンジュ「、、、」
後藤田「わかりました。やってみましょう」
ヨンジュ「お願いします」

後藤田、道具の尻尾を操作しながら、

後藤田「(尻尾を振りながらなので声も震える)彩香、ヨソベエ帰ってきたよ。ほら、元気になって帰ってきたよ、ウォンウォンウォウォーン、、、ごめんなさい」
ヨンジュ「あのう」
後藤田「はい」
ヨンジュ「なんでこんなにまでして騙さなきゃいけないんですか?」
後藤田「昨日の彩香との会話、聞いてた?」
ヨンジュ「え?あ、はい」
後藤田「あの子は人と話したがらない。私とも話したがらない。すぐに自分の世界に入り込みたがる。あんなにかわいい子なのに友達がいないのはそのせいなのよ。でもヨソベエとだけは話すの」
ヨンジュ「ヨソベエと?」
後藤田「あなたペット飼ったことない?返事してくれるわけじゃないのに話しかけたことない?」
ヨンジュ「ペット飼ったことないんです」
後藤田「ペットにしか話せないことってあるのよ。返事はなくていいから聞いてもらいたいこと」
ヨンジュ「あるんですか?」
後藤田「私にはないけど彩香にはあったんです。今、ヨソベエがい

なくなったらあの子は一人ぼっちになってしまうわ」

ピンポーンとチャイムの鳴る音。

後藤田「ちょっと失礼します」

後藤田、インターフォンに出る。万丈、後藤田家の玄関の前に登場。後藤田と万丈、インターフォン越しに話す。

後藤田「はい」
万丈「昨日お伺いしました。ニコラクリームの万丈です」
後藤田「ニコラクリーム？」
万丈「はい、ニコラクリームです」
後藤田「今来客中なんです。またにしてもらえる？」
万丈「あのう、サンプル使っていただけました、、、」

後藤田、インターフォンを切る。万丈、退場。

後藤田「ごめんなさい」
ヨンジュ「誰ですか？」
後藤田「昨日のセールスマン。しつこい、、、あ」
ヨンジュ「どうしました？」
後藤田「彼にお願いするのはどうだろう？」
ヨンジュ「え？」
後藤田「そうよ。それしかない」

後藤田、急いで外に出て行き、万丈を連れて戻ってくる。

後藤田「いいからいいからちょっと入って」
万丈「いやどうもありがとうございます。あれ？ほんとにご来客中だったんですね？」
後藤田「え？」
万丈「そうやって断られることが多々ありましてさてどうぞお座りください」

後藤田、椅子に座る。万丈、鞄から商品を取り出して、

万丈「こちらが我が社おすすめの新製品モイスチャーニコラクリームでござ」
後藤田「（遮って）それよりね」
万丈「はい」
後藤田「あなた尻尾振れる？」
万丈「尻尾？」
後藤田「尻尾」
万丈「尻尾？」
後藤田「誰にどんなこと言われても尻尾を振れる？」
万丈「振れないことはないですね。セールスマンですから」
後藤田「本当？やったあ」
万丈「それが僕とどういう関係が？」
後藤田「うまく尻尾振れたらそれ百セット買ってあげてもいいわよ」
万丈「本当ですか？」
後藤田「本当」
万丈「やりますよ。やらせてください」

万丈、ネクタイなどを直して、

万丈「じゃあ気合を入れて行きます。奥様私驚きました。奥様の肌年齢ほんとお若い！」
後藤田「（万丈のゴマスリを止めて）そういうことじゃないの」
万丈「そういうことじゃない？わかりました。奥様こんなこと私誰にでもしてるわけじゃございません。クレオパトラのように奥様が美しいからこそです。こちらの高級ニコラパウダーをお付けします」
後藤田「ごめんなさい」
万丈「え？」
後藤田「今もしかして振った？尻尾？」
万丈「はい」
後藤田「尻尾を振るってそういうんじゃないのよ。本当に尻尾を振るの」
万丈「私本当に尻尾を振っております」
後藤田「いや何て言ったらいいのかな」
万丈「私本当に尻尾を振っております」
後藤田「アレよ。そういう精神的に尻尾を振るんじゃなくて物理的に尻尾を振るの」
万丈「物理的に？」
後藤田「要は私が合図したら」

後藤田、手を尻尾のように振って、

後藤田「振ればいいだけだから」
万丈「ああ尻尾を振るというのは（ヨンジュから道具の尻尾を受け取り）これを振ればよかったんですか？」
後藤田「そうよ」
万丈「そうとも知らずにこんなこと。申し訳ございません」

後藤田「大丈夫。勘違いは誰にでもあるから。とりあえずやってみ
　ましょう」

　万丈、尻尾の道具を振って、後藤田の首や耳をくすぐる。

万丈「こうですね？」
後藤田「ああ、悪くないわ」

　ヨンジュ、万丈の肩をこずき、こっちを見ろのジェスチャー。
　道具の胴体を動かしながら、万丈に、道具の尻尾を動かすよ
　うに指示をする。

万丈「こうですね？」
ヨンジュ「もっとこう小刻みにスナップ効かせないと犬っぽくなら
　ないです」
後藤田「小刻みにスナップ効かせて」

　万丈、尻尾の動きにスナップをつけ加える。

万丈「どうでしょう？」
後藤田「どうかな？」
ヨンジュ「尻尾の動きだけじゃなくて音を作るのももっと意識して
　ください」

　万丈、尻尾の動きにスナップをつけ、音が出るように動かす。
　ヨンジュ、尻尾の音を聞く。

万丈「こうですか？」

後藤田「どう？」
ヨンジュ「１００％にはいかないけどまずまずかな」
後藤田「じゃあ本番行きましょう」
万丈「本番？」
後藤田「娘の前でこれをやるんです」
万丈「娘さん？」
ヨンジュ「後藤田さんには目が見えないお嬢さんがいるんです」
万丈「申し訳ございません私が話見えないです」
後藤田「その前に」

後藤田、ヨンジュと万丈にヨソベエの香水をかける。

ヨンジュ「うげえ」
万丈「これなんですか？」
後藤田「犬の体臭の香水」
万丈「え？うげえ」
後藤田「今から何見ても何が起こっても喋っちゃダメよ」
万丈「はい」
後藤田「はいもダメ」

万丈、黙ってうなずく。

後藤田「行きましょう」
万丈「え？」

後藤田、ヨンジュ、退場。万丈、オロオロしながら、自分の鞄を持って、二人についていく。

第５場　後藤田家・彩香の部屋

彩香、鏡台の前の椅子に腰掛けている。ノックをする音。

後藤田の声「彩香」
彩香「‥‥」
後藤田の声「彩香」
彩香「‥‥どうぞ」

後藤田、彩香の声を聞いて、ゆっくりとドアを開ける。ヨンジュと万丈、彩香の部屋へ入り、彩香のそばへ。

後藤田「彩香、ヨソベエがいたわよ」
彩香「どこにいたの？」
後藤田「ママの部屋」
彩香「どうしてママの部屋にいるの？」
後藤田「わからないわ」
彩香「ママの部屋も探したって言ってたよね？」
後藤田「探した時にはいなかったのに寝る時にはいたの」
彩香「どこかに隠れていたってこと？」
後藤田「そうかもしれない。とにかく見つかってよかったわ。ヨソベエ‥‥おいで」

ヨンジュと万丈、ヨソベエの息をしながら、彩香に近づく。

後藤田「（彩香に）彩香、お手してみない？」
彩香「‥‥」
後藤田「彩香」

彩香「お手」

ヨンジュと万丈、道具を使ってヨソベエのお手を再現する。

彩香「お回り」

後藤田「ヨソベエ、お回り」

ヨンジュと万丈、道具を使ってヨソベエのお回りを再現する。

彩香「伏せ」

後藤田「ヨソベエ、伏せ」

ヨンジュと万丈、道具を使ってヨソベエの伏せを再現する。

彩香「ゴロン」

後藤田「ヨソベエ、ゴロン」

ヨンジュと万丈、道具を使ってヨソベエのゴロンを再現する。
彩香が手を伸ばすと、道具の胴体のお腹の部分がある。

彩香「え？ママ？」

後藤田「どうしたの？」

彩香「なんでもない。ママ、ありがとう」

後藤田「じゃあママ行くわね」

後藤田、退場。

彩香「どこにいたんですか？」

ヨンジュ・万丈「、、、」
彩香「すっごく探したんですよ?」
ヨンジュ・万丈「、、、」
彩香「黙ってないでなんか言ってください」
ヨンジュ・万丈「、、、」

彩香、鏡台の抽斗からドッグフードを出し、手に載せる。

彩香「ヨソベエ」

彩香、ヨソベエに食べなさいと、ドッグフードを示す。ヨンジュ、戸惑いながら、彩香の手から口でドッグフードを取り、食べる。

彩香「私が目が見えないからってこういうことするのひどいと思いませんか?」

と言いながら、彩香、立ち上がって、両手を伸ばし、ヨンジュと万丈の気配がする方を追いかける（ただし、目が見えないので動きはゆっくりである)。ヨンジュと万丈、慌てて、彩香から逃げる。

彩香「(追いかけながら) あなたがやってることは私の目が見えたらできないことなんですよ?」
ヨンジュ・万丈「、、、」
彩香「(追いかけながら) これは一種のいじめなんだから」

突然、万丈の携帯電話が鳴る。が、万丈はどうしたらいいか

わからない。ヨンジュ、万丈から電話を奪い、電話を切って、そばにあった万丈の鞄の中にしまう。静寂。が、万丈の携帯電話はもう一度鳴る。彩香、携帯電話の着信音の方へ歩いていき、手探りで万丈の鞄の中から携帯電話を掴み、出る。

厳島の声「万丈お前遅くない？帰ってくるの？」
彩香「え？」
厳島の声「外回りだからってさぼってないよね？」
彩香「、、、」
厳島の声「おい万丈聞いてる？帰ってくるの遅いんだけどさぼってないよね？」
彩香「万丈さん？」
厳島の声「え？」
彩香「万丈さん、ですね？」
厳島の声「そちら様はどちら様ですか？」
彩香「この携帯電話は万丈さんのなんですね？」
厳島の声「はい」
彩香「なるほど」
厳島の声「あのすみません。万丈はそちらで何をやっているんでしょうか？」
彩香「え？」
厳島の声「万丈が何やってるか聞いてんだよ」
彩香「ええと、その、犬をやっています」
厳島の声「は？」
彩香「犬をやりながらハアハア言ってます」
厳島の声「あのうお宅はどちら様？」
彩香「私は後藤田彩香と申します」
厳島の声「私は万丈の上司の厳島と申します。それで万丈のことな

んですけど」
彩香「はい」
厳島の声「彩香ちゃんは、どういうご関係なの？」
彩香「関係も何も初対面です。昨日初めてお会いしました」
厳島の声「初めてなのに犬やってるんだ？」
彩香「私は頼んでないですよ。万丈さん？ですか？その方が勝手に」
厳島の声「万丈！」
万丈「すみません！」
厳島の声「彩香ちゃん。万丈に代わっていただいてもよろしいでしょうか？」
彩香「はい（万丈に）万丈さんお電話ですよ」
万丈「、、、」
彩香「（大声で）万丈さん！お電話！」

慌てて、彩香から携帯電話を受け取る万丈。

万丈「はい万丈です」
厳島の声「おい万丈。彩香ちゃんだってさ。可愛い声した女の子だねえ。どんな顔してんのかねえ？お前今何やってるわけ？」
万丈「すみません。これには深い事情がありまして」
厳島の声「犬って何？」
万丈「犬は犬です」
厳島の声「まさか仕事中に変なことしてるわけじゃないよね？」
万丈「え？誤解です」
厳島の声「自分の仕事が何かわかってるよね？」
万丈「化粧品のセールスです」
厳島の声「そうだよ。化粧品だよ。セールスだよ。なのに何？彩香って何？犬やってるって何？ハアハア言ってるって何？」

万丈「そうじゃないんです」
厳島の声「どういうことだ?説明しろ!」
万丈「何と言いますかお客さんに頼まれまして物理的に犬やってます」
厳島の声「は?」
万丈「物理的に犬やってるだけです。精神的にはやってないんです」
厳島の声「ふざけてる?」
万丈「ふざけてないんです。化粧品を買ってもらうために物理的に犬やって」
厳島の声「(怒って)精神的にでいいんだよ!」
万丈「え?」
厳島の声「外回りの営業が精神的に犬やるの悪くないよ。グッドだよ。むしろ物理的に犬やってるってどういうこと?」
万丈「ただ、、物理的なんです」
厳島の声「お前やっぱり変なことしてる!」
万丈「それだけは信じてください」
厳島の声「信じていいのか俺。万丈の電話に彩香ちゃんが出たこの状況で信じていいのか俺」
万丈「信じてください」
厳島の声「とにかくすぐ帰って来い!」
万丈「でも」
厳島の声「いいから帰って来い!」

厳島の声、電話を切って、消える。

彩香「あの、万丈さん」
万丈「はい万丈です。すぐ帰ります」
彩香「化粧品会社なのに男の人なんですね?」

万丈「申し訳ございません。男で」
彩香「どうしてここに？」
万丈「奥様に化粧品を買ってもらいたくて」
彩香「ママに頼まれたのね？」
万丈「はい」
彩香「ヨソベエは？」
万丈「ヨソベエ？」
彩香「あなたが演じてた犬」
万丈「ああ私は詳しくは聞いてないんです。申し訳ございません」

ヨンジュ、慌ててジェスチャーで、ヨソベエがまだ入院している、を表す。

彩香「知らないの？」
万丈「ちょっと頼まれだけで。すぐに出て行きますので」

万丈とヨンジュ、部屋から出て行こうとする。

彩香「待って」
万丈「え？」
彩香「化粧品見せて」
万丈「化粧品ですか？」
彩香「売ってるんでしょ？化粧品」
万丈「はい」
彩香「私はお客に見えない？」
万丈「え？」
彩香「私、お客に見えない？」
万丈「いえそんなことございません」

彩香「本当？」
万丈「はい」
彩香「こう見えてもお金持ってるんだけど」
万丈「見えてきました。見えてきました。お客様こそお客様です」
彩香「じゃあセールスしてください」
万丈「かしこまりました。どうぞこちらへ」

万丈、彩香を鏡台の前の椅子に座らせて、鞄からメイク道具を取り出す。

万丈「こちらが我が社おすすめの新製品モイスチャーニコラクリームでございます。お塗りしてもよろしいでしょうか？」
彩香「はい」

万丈、彩香の手にクリームを少し塗る。

万丈「匂いなどいかがでしょうか？」
彩香「いいです」
万丈「そう、いいですよね？いいですよね？さわってみていただいてもよろしいでしょうか？」
彩香「はい」
万丈「いかがですか？」
彩香「とてもいいです」
万丈「そう、いいですよね？いいですよね？多分、質が全く違うと思います。添加物とか全然入ってませんので肌触りからして違うと思います。普段はお化粧とかされるんですか？」
彩香「いえ、あまり」
万丈「じゃあ、１回して見ましょうかね」

彩香「お願いします」
万丈「緊張してます？」
彩香「あ、ちょっと」
万丈「大丈夫ですよ。ご安心ください」

万丈、彩香に化粧をしていく。ヨンジュ、心配そうにその様子を見守る。

彩香「あのう」
万丈「はい」
彩香「私って綺麗？」
万丈「え？」
彩香「お化粧前の顔」
万丈「もちろんお綺麗です。お化粧がいらないほどというと商売あがったりですがもっとお綺麗にしてみせます」
彩香「どう綺麗？」
万丈「え？」
彩香「どう綺麗？」
万丈「女性らしいと言いますか見ているとホッとするお顔です」
彩香「どこら辺が？」
万丈「特に頬あたり。このあたりです」

万丈、彩香の頬をチョンと軽くさわる。彩香の身体が少しだけ緊張する。彩香、自分の頬をさわりながら、

彩香「芸能人で言うと誰似？」
万丈「そうですねえ、ナタリーポートマンと賀来千香子を足して２で割った感じです」

彩香「それって美人なの？」
万丈「すごい美人ですよ」
彩香「万丈さんは誰似？」
万丈「え？私ですか？」
彩香「はい」
万丈「そうですね。あえて言えばブラピ？」
彩香「ブラピ？」
万丈「ブラッド・ピット。よく言われるんです。初期のブラッドピットに似てるって」
彩香「さわってもいい？」
万丈「はい」

彩香、万丈の顔をさわって、

彩香「ブラッド・ピットってこんな感じ？」
万丈「そうなんです。ブラッド・ピットってこんな感じなんです」
彩香「ありがとうございます、、、このファンデーションは何色を使ったの？」
万丈「クールバニラです」
彩香「ヴァニラ？ヴァニラってアイスクリームと同じヴァニラ？」
万丈「そうです」
彩香「冷たい色？」
万丈「アイスのヴァニラなんですが色は冷たくありません。ほんのりとろけるようなクリーム色です。とても暖かい色です」

万丈、彩香の唇に筆で口紅を塗っていく。

万丈「んま」

彩香「んま」

彩香、万丈の声に合わせて、唇を噛んで、口紅を伸ばす。

彩香「口紅は？何を使ったの？」
万丈「こちらのカーマインベージュです」
彩香「カーマインベージュ？どんな色？」
万丈「灼熱の太陽をイメージした強烈な、刺激的な赤です」
彩香「へえ、そうなんだ」
万丈「申し訳ございません。色名ばっかりで」
彩香「いいんです。想像してますから」
万丈「でもお客様の唇にぴったりの赤です。とてもお似合いです」
彩香「ありがとう」
万丈「はいどうぞ」

メイクが終わり、万丈、いつもの癖で彩香に手鏡を渡す。そして、メイク道具を片付ける。が、彩香からの返答がないので振り返り、自分が目が見えない人に鏡を渡していたことに気づく。万丈、鏡を彩香の手から取り、無言になってしまう。

彩香「どうしました？」
万丈「いや鏡を渡してしまって」
彩香「あ、今の鏡なんですね？」
万丈「、、、」
彩香「、、、」
万丈「あのう一つ聞いてもいいですかね？」
彩香「なんですか？」
万丈「もし目が見えるとしたら何を見たいですか？」

彩香「え？」
万丈「なんか聞いてみたくなっちゃって」
彩香「もし目が見えるとしたら何が見たいか？」
万丈「はい」

万丈、ふいに、物凄く失礼なことを聞いた気がして慌てる。

万丈「ああすみません。冗談です。忘れてください」
彩香「人の表情かな？」
万丈「え？人の表情？」
彩香「人の表情」
万丈「、、、意外です」
彩香「そう？」
万丈「そんなこと考えたこともなかったです。どうしてですか？」
彩香「なんとなく」
万丈「空とか見たくないですか？青い空とか夕焼けとか星空とか」
彩香「それって綺麗なの？」
万丈「はい」
彩香「そうなんだ、、、でも人の表情が見たいかな」
万丈「なんで？」
彩香「なんでかな？なんとなく」
万丈「声でもわかる気がしますよ表情は」
彩香「そうなんですか？」
万丈「、、、」
彩香「目が見えたら人の表情を見たいなんて思わないのかなあ？」
万丈「（戸惑って）どうなんだろう？」

ノックをする音。

後藤田の声「彩香」
彩香「ちょっと待って」

万丈とヨンジュ、ヨソベエの演技に戻る。

彩香「万丈さん」
万丈「え？」
彩香「明日も来る？」
万丈「はい」
彩香「どうぞ」

後藤田、登場。彩香、鏡台に伏せて、化粧をした顔を隠す。
ヨンジュ、道具の胴体と前足を動かし、万丈は道具の尻尾を振る。

後藤田「どうしたの？」
彩香「何が？」
後藤田「顔隠して」
彩香「別に隠してないよ」
後藤田「変な子」
彩香「ママこそどうしたの？」
後藤田「ヨソベエ散歩に連れて行こうと思ったの」
彩香「はーい。ヨソベエ行ってらっしゃい」
後藤田「変な子」

ヨンジュ、万丈、後藤田の順でドアの方へ。ドアがガチャッと閉まる音。彩香、顔を上げ、嬉しそうに自分の化粧をした

顔をさわる。彩香、退場。

光一郎の声「なんで家に帰ってきて化粧すんだよ?」

第6場　ヨンジュのアパート

光一郎、登場。後ろから、ヨンジュも入ってくる。

ヨンジュ「だって今日届いたんだもん」

光一郎「何が届いたの?」

ヨンジュ「新しい化粧品」

光一郎「通販?」

ヨンジュ「そう。見て。オールインワン・ファンデーション、、、すごっ」

光一郎「すごっ」

ヨンジュ、光一郎を見つめる。

ヨンジュ「お客様。こちらへどうぞ」

光一郎「え?」

ヨンジュ「お客様。こちらへどうぞ」

光一郎「いいです」

ヨンジュ「お客様〜!」

光一郎「わかったよ」

光一郎、ヨンジュのそばに行く。ヨンジュ、光一郎を椅子に座らせる。ヨンジュと光一郎の化粧品セールスごっこが始まる。

ヨンジュ「メイクアップしてあげる」

ヨンジュ、光一郎にメチャクチャにお化粧していきながら、

ヨンジュ「ニコラミネラル、、かわいいかわいい」
光一郎「くすぐったいんですけど」
ヨンジュ「ふふふ」
光一郎「なんで笑ってんだよ?」
ヨンジュ「お客様、目を瞑ってください。私の声どうですか?」
光一郎「綺麗な声だと思いますよ」
ヨンジュ「ありがとうございます。それだけですか?」
光一郎「情熱的な声ですね」
ヨンジュ「それだけですか?」
光一郎「怒りっぽそうで優しそうで寂しそうで明るそうです」
ヨンジュ「メチャクチャですね。は~い。ありがとうございます。
終わりました」

ヨンジュ、光一郎に鏡を差し出しながら、

ヨンジュ「どう?韓国風メイク」
光一郎「美しい。俺ってこんなに美しかった?自分に自信が持てる
ようになってきた。ニコラミネラルすごい」
ヨンジュ「ははは」
光一郎「お客様。俺もやってやるよ日本風メイク」
ヨンジュ「いいよ」
光一郎「やってやるって」
ヨンジュ「いいって、、助けて!」

光一郎がパフをヨンジュから奪う。ヨンジュ、逃げる。

光一郎「自分だけやってずるいだろ」

ヨンジュ「きゃあああ」

光一郎、ヨンジュを捕まえて、メチャクチャにパフを塗ろうとしたところ、

ヨンジュ「白線の内側にお下がりください」

光一郎「え?」

光一郎、一歩下がる。

光一郎「今日本人ぽい」

ヨンジュ「ほんと?」

光一郎「ほんと」

ヨンジュ「まもなく3番線に電車がまいります。白線の内側にお下がりください。どう?」

光一郎「いるいる。日本人ぽい」

ヨンジュ、コンビニでバイトしている日本人の真似をする。

ヨンジュ「いらっしゃいませ。こちらあたためますか?こちらあたためますか?こちらあたためますか?」

ヨンジュ、別の日本人の真似をする。

ヨンジュ「ごめん遊ばせ。ごめん遊ばせ。ごめん遊ばせ」

ヨンジュ、また別の日本人の真似をする。

ヨンジュ「どーもどーも。どーもどーもどーも」
光一郎「おお。だいぶ日本語うまくなったなあ」
ヨンジュ「言葉も日本人に見える？」
光一郎「それはまだまだ。発音がまだまだ、、喋らなきゃ日本人に見えるよ」
ヨンジュ「ああ」

ヨンジュ、落ち込む。光一郎、ヨンジュを抱き締めながら、

光一郎「大丈夫だって。俺と一緒にいたらもっと日本語上手くなれるって」
ヨンジュ「ふふふ（元気になって）綺麗な目だよ。光一郎の目、、ちょっとなんで目を瞑るのよ」

光一郎、目を瞑って笑う。ヨンジュも笑う。

ヨンジュ「ねえ、もし目が見えなかったら何を見たいと思う？」
光一郎「どういう意味？」
ヨンジュ「もし目が見えない人だったら何を見たいと思う？」
光一郎「（目を開けて）自分の顔かな？」
ヨンジュ「え？」
光一郎「だって見たいだろ？自分の顔は。イケメンなのかそうじゃないのか」
ヨンジュ「（笑いながら）光一郎（あんた）の顔なんて見る価値ない

でしょ？」
光一郎「見る価値ない顔かどうかわからないから見たいと思うんでしょ？」
ヨンジュ「私の顔は見たくない？」
光一郎「言わない」
ヨンジュ「私の顔は見たくない？」
光一郎「言わない」
ヨンジュ「何で言わないのよ？」
光一郎「なんでも」

光一郎、退場。

ヨンジュ「何で言わないのよ？私の顔は見たくない？光一郎！、、、
光一郎」

光一郎を追いかけて、ヨンジュ、退場。

第7場　後藤田家の応接間

後藤田、登場。ヨンジュを待っている。ヨンジュ、スケートボードなどで使う、肘と膝のサポーターを付けた格好で登場。

ヨンジュ「おはようございます」
後藤田「おはようございます」
ヨンジュ「遅くなってすみません」
後藤田「どうしたんですか？それ」
ヨンジュ「え？」
後藤田「その格好？」

ヨンジュ「このほうがいいかなと思いまして」
後藤田「ちょっと変？」
ヨンジュ「お嫌いですか？」
後藤田「そういうわけじゃないんだけどそこまで張り切らなくてもいいかなって思って」
ヨンジュ「そうですか？」
後藤田「あなたにお話しなきゃいけないことがあるの」
ヨンジュ「何ですか？」
後藤田「おいで」

後藤田、立ち上がり、部屋の外へ。そして、犬のウォンウォンという鳴き声、ゼエゼエという息を吐く音と一緒に戻ってくる。そこには、新しいフランダース犬がいる。後藤田、新しい犬にさわりながら、

後藤田「お座り。いい子いい子」
ヨンジュ「どうしたんですか？それ」
後藤田「ブービエ・デ・フランダース」
ヨンジュ「え？」
後藤田「ブービエ・デ・フランダース」
ヨンジュ「ブービエ・デ・フランダース？」
後藤田「伏せ」

後藤田、仰向けになった新しい犬のお腹をさわりながら、

後藤田「フランスから今朝届いたんです。来て来てさわって」

後藤田、ヨンジュに新しい犬をさわらせる。

後藤田「どう？」
ヨンジュ「フカフカ」
後藤田「かわいいでしょ？」
ヨンジュ「かわいいです」
後藤田「大変だったんですよ。ヨソベエと同じサイズのフランダース犬を探すの。でもよかった見つかって。色もほとんど一緒だし」
ヨンジュ「どういうことですか？」
後藤田「わからないよね？」
ヨンジュ「はい」
後藤田「ヨソベエとして飼うの」
ヨンジュ「え？」
後藤田「だからヨソベエとして飼うの」
ヨンジュ「でもヨソベエじゃないですよね？」
後藤田「ヨソベエと同じ大きさのフランダース犬」
ヨンジュ「最初から新しい犬を買うって決めてたんですか？」
後藤田「、、、」
ヨンジュ「なんで言ってくれなかったんですか？」
後藤田「あなたにはそんなこと関係なく演じてもらいたかったんです。それにいつ届くかはわからなかったんです。ごめんなさい」
ヨンジュ「私たちはつなぎだったってことですか？」
後藤田「ずっとあなたに演じ続けてもらうわけにはいかないでしょ？あなたは人間だから」
ヨンジュ「万丈さんには伝えたんですか？」
後藤田「さっきお電話しましたよ。お伺いできないのは残念ですってあなたにもよろしくって」

ヨンジュ、部屋から出て行こうとするが、

後藤田「今日あなたには別の演技をお願いしようと思って」
ヨンジュ「、、、」
後藤田「不安でしょ？この子のこと本当にヨソベエだって思うか」
ヨンジュ「、、、」
後藤田「初日の獣医のペク先生復活。そばで見ていて欲しいんです」
ヨンジュ「彩香さん（彼女）は私達のヨソベエが偽者だって知ってます。今からでもヨソベエが死んだことを伝えるべきなんじゃないですか？」
後藤田「今度は本物の犬がヨソベエになる」
ヨンジュ「偽者なのは変わらないです」
後藤田「偽者でもいないよりはマシ。最初は偽者だと思ってもしばらく一緒に暮らしていれば本物とかわらない存在になっていくの。それじゃあダメ？」
ヨンジュ「この子はかわいいけどヨソベエじゃないんです」
後藤田「（やや強く）だから何？」
ヨンジュ「え？」
後藤田「（強く）それの何が悪いの？」
ヨンジュ「、、、」
後藤田「生きるために幻が必要な時があるの。まだわからないんですか？これは彩香のためなんです。お願いします」
ヨンジュ「、、、」
後藤田「、、、」
ヨンジュ「わかりました。やります最後まで」
後藤田「ありがとう。じゃあ行きましょう、、（新しい犬に）ヨソベエ」

後藤田とヨンジュ、新しい犬を連れて、退場しかける。する

と、彩香が入ってきて、空間は彩香の部屋になる。

第８場　後藤田家・彩香の部屋

鏡台の前の椅子に腰掛けている彩香。ドアの前に立つ、後藤田、ヨンジュ、新しい犬。

後藤田「彩香」
彩香「はい」
後藤田「獣医のペク先生覚えてる？」
彩香「うん」
後藤田「先生がヨソベエのこともう一度診に来てくださったの」
ヨンジュ「こんにちは」
彩香「こんにちは」
ヨンジュ「特に問題ないとは思ったんですが検診だけさせていただこうと思いまして」
後藤田「で特に問題はなかったみたい。（新しい犬に）よかったね。ヨソベエ」
ヨンジュ「ヨソベエのことで何か気になったことはありませんか？」
彩香「気になったことですか？」
ヨンジュ「少し痩せたとか太ったとか」
彩香「ちょっと太ったというか大きくなったような気がします」
後藤田「入院中って太るのよ。あまり動けないから。とにかく完全回復したってことよね？」
ヨンジュ「そうなります」
後藤田「よかったね彩香」
彩香「先生ありがとうございました」
ヨンジュ「私は特に何もしてませんから。ヨソベエが頑張ったんで

す」
後藤田「それじゃあ先生玄関までお送りしますね」
ヨンジュ「はい」

後藤田、目配せして、退場。ヨンジュはそこに残る。

彩香「万丈さん」
ヨンジュ「、、、」
彩香「あの獣医の先生もふてぶてしいね。万丈さんが見えててあんなこと言ってるんでしょ？私が騙されたふりをしてるとも知らずに、ふふ」
ヨンジュ「、、、」
彩香「どうですか？今日のお化粧。ちょっとだけ自分でやってみたの」
ヨンジュ「、、、」
彩香「どうしたんですか？ずーっと黙って」
ヨンジュ「、、、」
彩香「この間の質問覚えてます？もし目が見えるとしたら何が見たいか？って質問。私、人の表情が見たいって言ったじゃないですか？ずっと考えてたんです。その理由」
ヨンジュ「、、、」
彩香「もちろん声や音でなんとなくはわかりますよ。その人の感情とか今楽しいのか楽しくないのかとかは」
ヨンジュ「、、、」
彩香「でも見てみたいの。だって表情にはさわれないから」
ヨンジュ「、、、」
彩香「もっと知りたい。みんなの表情は私のイメージと違うかもしれないから」

ヨンジュ「、、、」
彩香「聞いてます？万丈さん」
ヨンジュ「、、、」
彩香「万丈さん？」

彩香、立ち上がり、部屋の中で万丈を探す。すると、新しい犬とぶつかる。

彩香「え？」

彩香、腰を下ろし、新しい犬の背中をさわる。

彩香「え？どういうこと？」

彩香、新しい犬を抱きしめ、４本の足、尻尾、顔を順にさわっていく。

彩香「ヨソベエ？」

彩香、もう一度、新しい犬の背中、４本の足、尻尾、顔を順にさわっていく。

彩香「ヨソベエなの？」

彩香、匂いを嗅ぐ。ヨソベエと似ているような、似てないような、とにかく犬の匂いがする（音で表される）。彩香、匂いだけでは、確信が持てない。その彩香の姿を見ていて、耐えられなくなったヨンジュは、

ヨンジュ「私ペク・ヨンジュです」
彩香「ペク先生？」
ヨンジュ「はい」
彩香「帰ったんじゃなかったんですか？」
ヨンジュ「後藤田さんに頼まれたんです。彩香さんとヨソベエをちょっとだけ見守っててくれないかって」

彩香は突然、一言だけ怒鳴る。

彩香「ママは何を考えてるの！」

間。

ヨンジュ「お母さんは彩香さんが寂しがるのをすごく心配し、、、」

間。

ヨンジュ「私の声どんな風に聞こえる？」
彩香「え？」
ヨンジュ「獣医ぽい声？」
彩香「どういう意味ですか？」
ヨンジュ「どんな声なのか気になって」
彩香「大人っぽい声、、優しくて、思いやりがあってピュアな感じがする」
ヨンジュ「別にピュアじゃないです」
彩香「ピュアな感じするけどな。誠実そうで嘘つかなそうで」
ヨンジュ「しょっちゅう嘘ついてます」

彩香、ヨンジュをまるで見えているかのように見つめる。

彩香「先生、正直に答えてください」
ヨンジュ「はい」
彩香「この子の匂いはヨソベエの匂い？私の記憶の中のヨソベエの匂いじゃない気がするんです。教えてください。ヨソベエはもういないんですか？」
ヨンジュ「お預かりしていたヨソベエはお返ししました」
彩香「先生、、私そんなに弱くないから」
ヨンジュ「、、、」
彩香「、、、」
ヨンジュ「交通事故だって聞きました。お母さんと散歩中に」
彩香「死んじゃったの？」
ヨンジュ「はい」
彩香「、、、そっかヨソベエにはもう会えないのかあ」
ヨンジュ「、、、」
彩香「、、、」

ヨンジュ、意を決して、道具の前足で、彩香の膝にさわり、すぐ離れる。

彩香「先生？」
ヨンジュ「はい？」
彩香「あの子今どこにいる？」
ヨンジュ「今部屋の隅にいます」
彩香「本当？」
ヨンジュ「どうしたんですか？大丈夫ですか？」

彩香「、、はい」

ヨンジュ、道具の前足で、彩香の膝にさわり、またすぐ離れる。

彩香「先生、あの子本当にいない？」
ヨンジュ「はい」
彩香「（自分の膝を撫でながら）誰かが私にさわるの。あの子本当にいない？」
ヨンジュ「彩香さん、もしかしたらヨソベエじゃないですか？」
彩香「え？」
ヨンジュ「ヨソベエが彩香さんに会いに来たんじゃないですか？」
彩香「幽霊ってこと？」
ヨンジュ「わかりません」

ヨンジュ、道具の前足で、彩香の膝にさわる。

彩香「先生がやってるんでしょ？」
ヨンジュ「私は何もやってないです」
彩香「嘘だ」
ヨンジュ「嘘じゃないです」
彩香「嘘だ」
ヨンジュ「嘘じゃないです」
彩香「こんなことして何の意味があるの？」
ヨンジュ「、、さよならを言ってください。ヨソベエに」

間。

彩香「先生」
ヨンジュ「はい」
彩香「ちょっとだけ席をはずしてもらえますか？」
ヨンジュ「わかりました」

ヨンジュ、部屋のドアまで行って、ドアを閉める音をさせるが、出てはいかない。彩香もそのことはわかるが何も言わない。ヨンジュ、道具の前足で、彩香の手にさわる。

彩香「ヨソベエ」
ヨンジュ「、、、」
彩香「初めてあなたがうちに来た日のこと覚えてる？」
ヨンジュ「、、、」
彩香「あなたはまだこんなに小さかった」
ヨンジュ「、、、」
彩香「私もまだ小さかった」
ヨンジュ「、、、」
彩香「私達小さいもの同士で抱き合ったの」
ヨンジュ「、、、」
彩香「二人で変なダンス踊ったよね？」
ヨンジュ「、、、」
彩香「あれダンスって言うのかな？」

彩香、立ち上がり、ヨンジュをリードしながら、床を強く踏み鳴らす。その場で走るかのようにダダダと激しく足踏みしながら、彩香とヨンジュは、ダンスのようなものを踊る。やがて、ダンスはクライマックスに達する。彩香、突然、ヨンジュを抱き締めて、

彩香「ヨソベエ。私新しい犬飼うことにした。ヨソベエって名前つけて」
ヨンジュ「、、、」
彩香「ごめんね」

彩香はヨンジュの元を離れ、新しい犬のそばへ行く。

彩香「ペク先生、、ペク先生」
ヨンジュ「はい」
彩香「ありがとう」

彩香、新しい犬と一緒に退場。光一郎、登場。すると空間は、ヨンジュのアパートに変わる。

第9場　ヨンジュのアパート

光一郎「じゃあ犬を演じるのは今日が最後だったってこと?」
ヨンジュ「犬じゃなくてヨソベエ」
光一郎「心残りはない?」
ヨンジュ「心残り?」
光一郎「(韓国語で)ミリョンオプソ?(未練ない?)」
ヨンジュ「ないよ。やっと変な仕事から解放されて清々しい感じ」
光一郎「結構楽しんでたくせに」
ヨンジュ「そんなことないです。ウォンウォウォウォーンふふふ」
光一郎「でも残酷な話だよね」
ヨンジュ「残酷?」
光一郎「(韓国語で)チャンノック(残酷)(日本語で)悲しい話。

彼女はヨソベエじゃないって知りつつこれからずっと別の犬と一緒にいるんだよ？」
ヨンジュ「それ悲しい？」
光一郎「ヨソベエはいないんだよ？」
ヨンジュ「記憶の中にはいる」
光一郎「記憶の外にはいない。それでも一緒にいたいの？」
ヨンジュ「うん」

ヨンジュ、光一郎の元に駆け寄る。光一郎、ヨンジュの頭を撫でる。ヨンジュ、光一郎の匂いを嗅ぐ（音で表される）。

光一郎「ヨンジュ」
ヨンジュ「ん？」
光一郎「本当の俺はこんなに優しくない」
ヨンジュ「そんなことないよ優しかった」
光一郎「知ってるだろ？俺から別れようって言ったんだよ？」
ヨンジュ「、、」
光一郎「いいの？俺の幻を見てて」
ヨンジュ「彩香さんだって幻を見てる」
光一郎「俺は生きてる。別のところで。死んじゃったヨソベエの幻を見るのとは違うんだ」
ヨンジュ「私達やり直せない？」
光一郎「無理だよ」
ヨンジュ「だってあんなに二人で楽しくやってきたじゃん。いつも。いつも」
光一郎「俺達はもう壊れたんだよ」
ヨンジュ「壊れたらやり直しちゃいけないの？ずっと壊れたまま？
光一郎「やり直せないものもあるから」

ヨンジュ「、、、」
光一郎「俺達はきっとやり直せないよ」
ヨンジュ「、、、」
光一郎「それがわかってるから俺の幻を見てるんだろ？」
ヨンジュ「、、、」
光一郎「、、、」
ヨンジュ「光一郎」
光一郎「ん？」
ヨンジュ「目を瞑って１０数えるからそしたら」
光一郎「わかってる。いなくなるよ」
ヨンジュ「１，２，３，４，５，６，７，８，９，１０」

ヨンジュのカウントは、最初の５カウントは日本語で、６カウント目から韓国語になる。ヨンジュが１０数えている間に、光一郎、退場。１０を数えたヨンジュ、光一郎の幻がいたところを見るが、もうそこには何もいない。

ヨンジュ「光一郎」

ヨンジュ、目を瞑り、光一郎の匂いを嗅ぐ。しかし、もうその匂いはしない。溶暗。終わり。